

第4問

次の文章は、唐の杜牧（八〇三―八五二）の【詩】「華清宮」とそれに関連する【資料】I～IVである。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 50）

【詩】

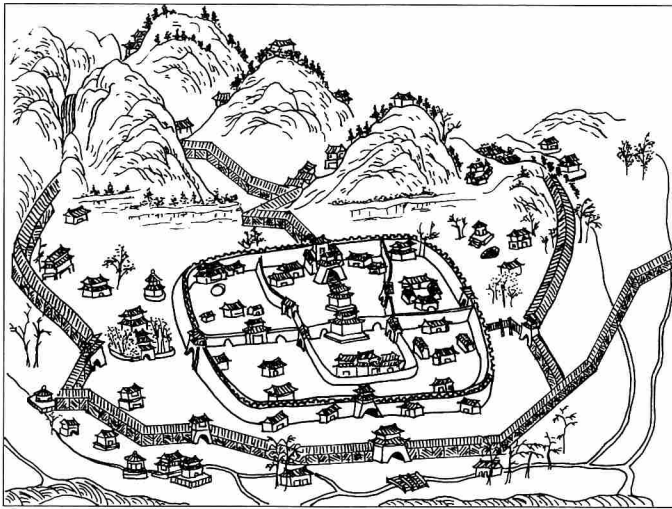
華清宮^{（注1）}

長安^{ヨリ}回望^{スレバ}繡成^{（注2）}堆^ヲ

山頂^ノ千門^{（注3）}次第^ニ開^ケ

一騎^{（注4）}紅塵^{（注5）}妃子^{（注5）}笑^フ

無^シ人^{（注6）}知^ル是^レ荔枝^{（注6）}枝^{（注6）}来^{（注6）}



多くの門や御殿が並ぶ華清宮の全景

【資料】

I 『天^(注7)宝遺事』云、「貴妃嗜荔枝。當時涪州^(注8)致貢。以馬^(注9)遞馳載^(さいスルコト)」

七日七夜至^(ニシテ)京^(ニ)。人馬多^(ヲ)斃^(たふレ)於路^(ニ)。百姓^(ア)苦^(シムト)之^(ニ)。

II 『疊山^(注10)詩話』云、「明皇致^(シテ)遠物。以悦^(よろこ)婦人^(ヲ)。窮人力絶。人命有^(ル)」

所不顧。

III 『遯齋^(注12)閑覽』云、「杜牧華清宮詩尤膾炙^(イ)人口^(ニ)。拋^(レバ)唐紀^(注13)明皇

以^(テ)十月^(ヲ)幸^(シ)驪山^(ニ)。至^(リテ)春^(ニ)即還^(カヘル)宮^(ニ)。是未^(ダ)嘗^(テ)六月^(ニ)在^(ラ)驪山^(ニ)也。然^(ルニ)

荔枝盛暑^(ニシテ)方熟^(スト)。

(〔詩〕と〔資料〕I、IIIは蔡正孫『詩林広記』による)

IV 『甘沢謡』曰、「天宝十四年六月一日、貴妃誕辰、駕幸驪山。

命シテ小部(注17)音聲ニ奏シ樂ヲ長生殿(注18)進ニ新曲ヲ未ダ有ラ名ヲ會タ南海(注19)獻ジ荔

枝ヲ因ニ名ニ荔枝ノ香ト。

〔資料〕IVは程大昌『考古編』による

(注)

- 1 華清宮——唐の都長安の郊外にある、驪山の温泉地に造営された離宮。
- 2 繡成堆——綾絹を重ねたような驪山の山容の美しさをいう。
- 3 次第——次々と。
- 4 紅塵——砂煙。
- 5 妃子——楊貴妃のこと。唐の皇帝玄宗(六八五—七六二)の妃。
- 6 荔枝——果物のライチ。中国南方の特産物。
- 7 『天宝遺事』——唐の天寶年間(七四二—七五六)の逸話を集めた書。王仁裕著。
- 8 涪州——中国南方の地名。
- 9 馬通——早馬の中継による緊急輸送。公文書を運ぶのが本来の目的。
- 10 『疊山詩話』——詩の解説・批評や詩人の逸話を載せた書。謝枋得著。

- 11 明皇——玄宗を指す。
- 12 『遜齋閑覽』——学問的なテーマで書かれた随筆集。陳正敏著。ちんせいびん
- 13 唐紀——唐の時代についての歴史記録。
- 14 『甘沢謡』——唐の逸話を集めた書。袁郊著。えんこう
- 15 誕辰——誕生日。
- 16 駕——皇帝の乗り物。
- 17 小部音声——唐の宮廷の少年歌舞音楽隊。
- 18 長生殿——華清宮の建物の一つ。
- 19 南海——南海郡のこと。中国南方の地名。

問1 この【詩】の形式と押韻の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

31。

- ① 形式は七言律詩であり、「開」「来」で押韻している。
- ② 形式は七言律詩であり、「堆」「開」「来」で押韻している。
- ③ 形式は七言律詩であり、「堆」「開」「笑」「来」で押韻している。
- ④ 形式は七言絶句であり、「開」「来」で押韻している。
- ⑤ 形式は七言絶句であり、「堆」「開」「来」で押韻している。
- ⑥ 形式は七言絶句であり、「堆」「開」「笑」「来」で押韻している。

問2

波線部(ア)「百姓」・(イ)「膾炙人口」・(ウ)「因」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

32

34

(ア)

32 「百姓」

⑤	④	③	②	①
罪人	商人	皇帝	旅人	民衆

(イ)

33 「膾炙人口」

⑤	④	③	②	①
人々が苦痛に感じている	広く知れわたっている	詳しく分析されている	一言では到底表せない	異口同音に批判する

(ウ)

34 「因」

⑤	④	③	②	①
またもや	とりあえず	ことさら	やむをえず	そのために

問3 傍線部「窮人力絶人命、有所不顧。」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 窮_レ人力絶_二人命、有_三所不_レ顧。
- ② 窮_二人力絶_一人命、有_レ所不_レ顧。
- ③ 窮_二人力絶_一人命、有_レ所不_レ顧。
- ④ 窮_二人力絶_二人命、有_レ所不_レ顧。
- ⑤ 窮_レ人力絶_レ人命、有_レ所不_レ顧。

人力の人命を絶たんとするを窮めて、所として顧みざる有りと。

人の力めて絶人の命を窮むるは、有れども顧みざる所なりと。

窮人の力は絶人の命にして、有る所顧みざるのみと。

人力を窮め人命を絶つも、顧みざる所有りと。

人を窮めて力めしめ人を絶ちて命じ、所有るも顧みずと。

問4 【詩】の第三句「騎紅塵妃子笑」について、【資料】Ⅰ・Ⅱをふまえた解釈として最も適当なものを、次の①～⑤

のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 玄宗のため楊貴妃が手配した荔枝を早馬が砂煙を上げながら運んで来る。それを見て楊貴妃は笑う。
- ② 楊貴妃のため荔枝を手に入れようと早馬が砂煙のなか産地へと走りゆく。それを見て楊貴妃は笑う。
- ③ 楊貴妃の好物の荔枝を運ぶ早馬が宮殿の門の直前で倒れて砂煙を上げる。それを見て楊貴妃は笑う。
- ④ 玄宗の命令で楊貴妃の好物の荔枝を運ぶ早馬が砂煙を上げ疾走して来る。それを見て楊貴妃は笑う。
- ⑤ 玄宗に取り入りたい役人が荔枝を携えて砂煙のなか早馬を走らせて来る。それを見て楊貴妃は笑う。

問5

【資料】Ⅲ・Ⅳに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

37。

① 【資料】Ⅲは、玄宗一行が驪山に滞在した時期と荔枝が熟す時期との一致によって、【詩】の描写が事実符合することを指摘する。【資料】Ⅳは、玄宗一行が夏の華清宮で賞玩したのは楽曲「荔枝香」であったことを述べており、【資料】Ⅲの見解に反論する根拠となる。

② 【資料】Ⅲは、玄宗一行が驪山に滞在した時期と荔枝が熟す時期との一致によって、【詩】の描写が事実符合することを指摘する。【資料】Ⅳは、夏の華清宮で玄宗一行に献上された荔枝が特別に「荔枝香」と名付けられたことを述べており、【資料】Ⅲの見解を補足できる。

③ 【資料】Ⅲは、玄宗一行が驪山に滞在した時期と荔枝が熟す時期との不一致によって、【詩】の描写が事実反することを指摘する。【資料】Ⅳは、夏の華清宮で玄宗一行に献上された「荔枝香」が果物の名ではなく楽曲の名であることを述べており、【資料】Ⅲの見解を補足できる。

④ 【資料】Ⅲは、玄宗一行が驪山に滞在した時期と荔枝が熟す時期との不一致によって、【詩】の描写が事実反することを指摘する。【資料】Ⅳは、玄宗一行が「荔枝香」という名の荔枝を賞味した場所は夏の南海郡であったことを述べており、【資料】Ⅲの見解を補足できる。

⑤ 【資料】Ⅲは、玄宗一行が驪山に滞在した時期と荔枝が熟す時期との不一致によって、【詩】の描写が事実反することを指摘する。【資料】Ⅳは、「荔枝香」という楽曲名が夏の華清宮で玄宗一行に献上された荔枝に由来すると述べており、【資料】Ⅲの見解に反論する根拠となる。

【資料】をふまえた【詩】の鑑賞として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

38。

① 驪山の華清宮を舞台に、開放される宮殿の門、公文書を急送するはずの早馬、楊貴妃の笑みと、謎めいた描写が連ねられたうえで、それらが常軌を逸した荔枝の輸送によるものであったことが明かされる。事実無根の逸話をあえて描き、玄宗が政治を怠り宮殿でぜいたくに過ごしていたことへの憤慨をぶちまけている。

② 驪山の遠景から華清宮の門、駆け抜ける早馬へと焦点が絞られ、視点は楊貴妃の笑みに転じる。笑みをもたらしたの是不適切な手段で運ばれる荔枝であった。事実かどうか不明な部分があるものの、玄宗と楊貴妃の逸話を巧みに用い、玄宗が為政者の道を踏み外して楊貴妃に対する情愛に溺れたことを慨嘆している。

③ 驪山の山容や宮殿の門の配置を詳しく描き、早馬が上げる砂煙や楊貴妃の笑みなどの細部も見逃さない。早馬がもたらすであろう荔枝についても写實的に描写している。玄宗と楊貴妃に関する事実を巧みに詠み込んでおり、二人が華清宮でどのような生活を送っていたかについての歴史的知識を提供している。

④ 美しい驪山に造営された華清宮の壮麗さを背景に、一人ほほ笑む楊貴妃の艶やかさが印象的に描かれたうえで、ほほ笑みをもたらした荔枝の希少性について語られる。事実かどうかわからないことを含むものの、玄宗が天下のすべてを手に入れて君臨していたことへの感嘆を巧みに表現している。

⑤ 驪山に建つ宮殿の門は後景に退き、ほほ笑む楊貴妃の眼中には一騎の早馬しかない。早馬がもたらそうとしているのは、玄宗が楊貴妃とともに賞味する荔枝であった。事実かどうかを問題とせず、玄宗と楊貴妃の仲睦まじさが際立つ逸話を用いることで、二人が永遠の愛を誓ったことを賛美している。